

# くまもと文学・歴史館報

くまもと  
文学  
歴史館

## 第10号 目次

巻頭言 中島国彦(日本近代文学館理事長)	1頁
企画展・関連シンポジウム・収蔵品展報告	2頁〜5頁
イベント・館蔵資料トピック展示報告	6頁〜7頁
友の会事業報告・追悼井上智重元館長	8頁

清らかな湧水のほとりを歩くと、心がほっとする。「くまもと文学・歴史館」に前にお邪魔したのはコロナ禍前だから、久しぶりという感じだ。前回が漱石に関する講演会の講師としてだったが、今回はわたくしが会長を務める全国文学館協議会(全文協)の「総務情報部会」(二〇二四年一月一八日の金曜)の会場を、「文学・歴史館」で引き受けていただいたというご縁による。北は北海道から、南は鹿児島まで、全国三〇館以上の参加となると、宿の手配から翌日の見学会までセットするのは大変な

苦勞を話し合える、貴重な機会だ。今回の事例報告は三館、井上ひさしの財産を守っている山形の「遅筆堂文庫」、間も無く芥川龍之介記念館を開館する「田端文士村記念館」、そして県立図書館と一体化して住民に親しまれている「くまもと文学・歴史館」、それぞれ支

る姿に、目を見張った。残された原稿メモから、エネルギーがほとばしってくる。かつて刊行された日本近代文学館編の『日本近代文学大事典』にまだ立項されていないことがわかり、帰ってから早速増補の手配ができたのもうれしかった。熊本城の夜景を見ながら、



## 文学・歴史館が語り継ぐ 熊本本の文学遺産

中島 国彦  
(日本近代文学館理事長)

案内いただいた。それぞれの館の資料を守っている方々のお話も丁寧で、熊本ゆかりの文学者群像に親しむことができた。市内にはまだまだ、文学者ゆかりの記念館や建物がたくさんある。初日の行事が始まる前、漱石や小泉八雲の旧居を訪れると、午後の討議の前の時間に、思い思いの場所を訪れている部会の参加者に、何人も出会った。どの施設でも、昔の建物を大切に、若い人に知ってもらおうと工夫している。わかりやすいパンフレットや紹介ビデオによる、記念館同士のネットワークも、確かである。その中心に、「くまもと文学・歴史館」がある。思いがけない地震だったが、復興の動きは確かである。また訪れる時、更なる熊本の息吹きが伝わってくるに違いない。

ご苦勞だが、佐藤信館長を始め、実力ある職員の皆様のおかげで、雨もよいの中だったが、爽やかな話し合いができてありがたかった。

地方の歴史ある文学館を訪れて、現場の様子を実感しながら、日頃の地道な試みに耳を傾ける体験は、格別である。部会は、学芸員を中心お互いの

えている機関や運営の実態は違っても、工夫を重ねながら、貴重な資料に新たな照明を当て、訪れてくれる人に少しでも「文学」の香りを届けたいという思いは同じである。

討議がすみ、全員で、開催中であつた「光岡明の仕事」展を拜見した。没後二〇年という郷土の文学者を顕彰す

全国から集まった学芸員同士、情報交換し合えたのも貴重な体験だったと思う。聞いてみると、時間をやりくりして、街から書店がなくなる風潮の中、熊本市内を歩き、昔からの書店や古書店に立ち寄った人も多かった。

翌日土曜のバス見学では、「徳富記念園」と「熊本大学五高記念館」をこ

中島国彦(なかじま・くにひこ)  
一九四六年東京生まれ。日本近代文学専攻。早稲田大学名誉教授。公益財団法人日本近代文学館理事長、全国文学館協議会会長。

# 特別展

## 文字が語る古代のくまもと

期間 令和6年3月15日～5月6日  
会場 展示室1・2・3



国宝を含む平城宮木簡等、熊本ゆかりの古代の文字資料や、『万葉集』等の古代の文学に描かれた熊本の姿を紹介し、熊本が東アジアの中で育んだ豊かな文字文化の魅力を県内外に発信する特別展。入場者数は九、三四〇人(うち外国人一六七人)、資料点数は一九九点(パネル展示含む)。当館初の文化財保護法五十三条による国宝展示、また県外所在の国指定文化財展示(国宝三点、重要文化財十一件)。

### 【展示内容】

第一章「刀剣銘文の世界」では、江田船山古墳出土銘文鉄刀をはじめ、五世紀後半から七世紀にかけて、ヤマト王権が地方に進出する過程で刀剣銘文が果たした役割とその変遷を紹介した。

第二章「古代肥後の木簡」では、国宝平城宮木簡(奈良文化財研究所)・重要文化財大宰府木簡(九州歴史資料館)など、八世紀を中心に、肥後の役人が書いた木簡や肥後について書かれた木簡を一堂に集め、律令体制下における肥後での漢字文化の広がりについて見通した。第三章「文字文化と古代九州」では、九州での漢字文化の展開に触れつつ、写経や出土遺物から、肥後国各地の役所や寺院を拠点に文字文化が広がっていたことを示し、捺印例がない肥後国印を初めて原寸復元した。第四章「古代肥後の文学と文字」では、歴史書(『古事記』等)、和歌集(『万葉集』)、説話集等、古代文学に登場する肥後の人や出来事をひもといた。

### 【関連イベント】

(1) 連続講演会

- ① 3月16日 佐藤信(くまもと文学・歴史館長)「文字が語る古代の肥後」
- ② 3月30日 馬場基氏(奈良文化財研究所 都城発掘調査部 平城地区史料研究室長)「平城宮木簡と肥後国」
- ③ 4月13日 河野一隆氏(東京国立博物館学芸研究部長)「デジタルでよみがえる消えた文字」
- ④ 4月27日 松川博一氏(九州歴史資料館学芸調査室長)「木簡が語る大宰府と西海道―肥後国を中心に―」
- ⑤ 4月28日 赤司善彦氏(大野城心のふるさと館長)「出土文字で分かった古代大宰府の姿」

名)、⑥5月4日 長谷部善一氏(歴史公園鞠智城・温故創生館館長)「古代肥後国で文字資料を出土する遺跡」

⑦5月17日 佐藤信館長によるスペシャルギャラリートーク

- ① 3月17日 《14名》、② 4月14日 《19名》、③ 4月29日 《21名》、④ 5月5日 《43名》の四回開催(時間:13時30分～14時30分)。
- (3) ワークショップ(小中学生対象) 3月31日(時間:13時30分～14時30分)、場所:熊本県立図書館大研修室開催《32名》。参加者は小学一年生から中学二年生の児童及び保護者。万葉仮名などを参考に、木簡型の木片に墨と筆で文字を書き、キーホルダーを作成した。

※《》内は参加者数

### 【インバウンド対応と多言語化】

本展では、外国人観光客を含む来館者の増加と満足度向上を図るため、①会場内の写真撮影の許可、②無料体験コーナーの設置(オリジナル木簡しおりの作成、レプリカ「肥後国印」の押印)、③チラシ・展示解説パンフレット・館内表示・スマートフォンアプリ「ポケット学芸員」を活用した展示解説の多言語化(日・英・韓・簡体・繁

体)、④関連マンガ(日・英・韓・簡体・繁体)の読み放題コーナー、⑤観光事業者(熊本県観光連盟、熊本国際観光コンベンション協会など)との連携や、留学生(熊本大学)及び外国からの観光客等を対象とした特別鑑賞会(台熊友好会)を開催した(令和5年11月27日「水前寺・江津湖地域の『古代くまもと』の魅力に迫る』交流会、令和6年3月18日 観光事業者向け特別鑑賞会、3月21日 中国人留学生による特別鑑賞会、4月24日 台湾華語ユーザー向けの特別鑑賞会)。

### 【関連発行物(無料配布)】

展示解説パンフレット(日本語(A4、四十四頁)、英・韓・簡体・繁体(A4、四頁))



なお、本展は令和5年度及び令和6年度の文化資源活用事業費補助金(日本博2.0を契機とする文化資源コンテンツ創成事業、事業の区分・地域ゆかりの文化資産を活用した展覧会支援事業)の採択事業。(深瀬はるか)

### 特別展「文字が語る古代のくまもと」の成果

くまもと文学・歴史館 館長 佐藤 信

くまもと文学・歴史館で二〇二四年三月一五日〜五月六日に開催された特別展「文字が語る古代のくまもと」は、肥後に関する古代の文字資料を集めた、画期的な展示でした。和水町の江田船山古墳出土の大刀銘文、律令制の文書主義に従って肥後の古代役人が書いた木簡群、肥後で書写された奈良時代写経や、熊本県内で出土した墨書土器・文字瓦、そして宇城市の古代寺院浄水寺の石碑や古代文学に描かれた肥後の姿など、古代肥

後びとが書いた多様な漢字文化の世界を、ナマの歴史資料の迫力と魅力でご覧いただきました。「書は体をあらわす」と言われるように、古代肥後びとが書いた文字そのものからは、当時の人びとの息吹を感じることができます。国宝の平城宮木簡や重要文化財の大宰府木簡一点をふくみ、移動できない文化財は精巧なレプリカで展示しました。平城宮木簡の中には、養老七年(七三三)以来一三〇〇



年ぶりに肥後に「里帰り」した木簡もありました。熊本県初公開の品をふくめた充実した展示品の数々は、カラー図版を満載した四四頁の図録を無償配布したこともあわせて、話題となりました。国宝・重文をはじめこれだけの規模で優れた展示品を集め展示したことは、熊本県の博物館展示の上でも、出色なことといえます。また、肥後の古代歴史資料の集成は、『熊本県史』の古代史料編を実物資料で構成した感があります。そのほか、古代史料の第一線の研究者による連続講演会を会期中六回開き、多くの参加者に学んでいただきました。展示会場の一画に設けた、木簡のレプリカを触ったり、初めて復元した古代「肥後国印」を捺印するコーナー、そして木簡を作成するワークショップなどの体験講座も評判を呼びました。

これから古代熊本県の歴史を語る際には、必ずや今回の特別展が参考とされるに違いないという点も、展示の成果として取り上げられると思います。

### 企画展

#### 光岡明の仕事

期間 令和6年9月20日〜11月4日  
会場 展示室1



当館の前身・熊本近代文学館初代館長で、二〇二四年に没後二〇年を迎えた、直木賞作家・光岡明の業績を紹介する展示会を開催した。第一章では光岡明の経歴を紹介した。高校時代に作成した芸芸誌や、記者時代に熊本仲間たちと作った同人誌を展示した。また、新聞記者時代に、「日本談義」に書いた小説が「文学界」に掲載され、全国の読者を獲得し、芥川賞にノミネートされ、直木賞を受賞する過程について、自筆原稿とともに紹介した。また、愛用の手帳や日記も展示し、彼の行動や思索の一端を示した。第二章「光岡明作品を読む」では、「機雷」、「千里眼千鶴子」など、彼の代表作六作品について、内容をわかり

やすく紹介した。また、執筆資料やメモなど、創作の裏側がわかる資料を展示した。第三章「特別公務員」光岡明の仕事」では、熊本近代文学館長の就任以来、「特別公務員」を自称し、文化行政、文学振興、熊本の水、阿蘇の原野、景観、水俣など、様々なジャンルの仕事を引き受け、取り組んできた姿を紹介した。期間中、展示室3に新聞記者や千里眼千鶴子が登場するマンガなど、約二五〇冊を展示。手にとって読まれる姿が見られた。展示会パンフレットには、特別寄稿として、作家の梶尾真治氏をはじめ光岡明を知る三名の文章を掲載した。関連イベントとして、記念シンポジウムを開催。県立劇場理事長の宮尾尚氏、島田美術館館長の松下純一郎氏、作家の吉井恵瑠子氏が「直木賞作家・光岡明の仕事」について語り合った。(抄録を四〜五頁に掲載) (鶴本市朗)



記念シンポジウム抄録

直木賞作家・光岡明の仕事

令和6年(2024年)9月28日(土)  
熊本県立図書館 3階 大研修室

パネリスト

- 宮尾 尚 (熊本県立劇場理事長)
- 松下純一郎 (島田美術館館長)
- 吉井恵璃子 (作家)

松下純一郎(司会、以下松下) 皆様こんにちは。今日は「直木賞作家・光岡明の仕事」ということで、光岡さんとのつながり、お付き合いの関係あたりからお話ししていただければと思います。



松下純一郎氏

宮尾尚(以下宮尾) 県立劇場の宮尾です。没後二〇年という光岡先生の企画ですが、まだ二〇年、もう二〇年、という感じです。私は初代近代文学館の館長補佐兼使用人というご縁で、一緒に三年半仕事をさせていただきました。県立図書館は、昭和六〇年一〇月に近代文学館を併設した施設として開館し、当時の細川知事から、直木賞を受賞された光岡明先生に文学館館長に、と請われていらっしやいました。そこにやってきましたのが私というわけです。お辞めになられるときに出た「熊本近

代文学館一〇年史」の巻頭言「一〇年をふり返って」の中で、「素人コンビ」で「基礎づくり」に終始した」と書いておられますが、本当に光岡先生と行政職の職員で何とかやってきました。在任中四二本の特別企画展を開催し、『熊本近代文学館報』を三六号、三カ月に一回の季刊で発行し、一番熱心に行われたのは文学館友の会でした。光岡先生と安永先生がホスト、ホステスになってゲストを呼んでお話を聞くという「三人トークの会」の文学講座を毎月、その間に特別講演会をやられました。その中で光岡先生のいろいろな言葉を紹介しますと、「文学館を作家の卵のサロンにしたいんだよ」、「また編集者からこのまま地方の一名士でいいんですかと言われた」とか、「記事は足で書くんだよ」とか、「三井三池の争議を書くつもりで資料を集めているんだけどね。なかなか忙しくなってきた」ということもおっしゃっていました。

吉井恵璃子(以下吉井) 水俣からまいりました、吉井恵璃子と申します。光岡先生に初めてお会いしたのは、昭和

六二年の第九回県民文芸賞の表彰式でした。私の実家は芦北町のミカン農家でした。ある日、熊日に「県民文芸賞募集」の記事を見つけ、応募したのが選外佳作に入り、そのときの光岡先生の批評が、「もう一度書き直せばさらによくなるだろう」と褒めてあったんです。私は初めて褒められて嬉しくて、翌年「車がしゃべる」というのを書いて送りましたら一席になってしまいました。それで、表彰式へと繋がるわけですが、そのとき「せっかく農業をやっているのなら、農業を書きなさい」と言われたんです。この人が褒めてくださった光岡先生だと思って、思わず「はい」と言ってしまうました。これが、私自身がほんのちょっとだけ変わってきたきっかけでした。それから、先生に



吉井恵璃子氏

認めてもらうことを目標として小説を書いてまいりました。恐らく先生がいらっしゃらなければ、今の私は存在していないと思います。

松下 私は長く熊日におりました。昭和五年に入社し、一年間は校閲部でしたが、昭和四年に当時の文化・放送部に行き、そのときの部長が光岡さんでした。当時、芥川賞候補になられたところで、新聞社にいながら作家として書かれていた四〇歳代の後半です。大体八時ごろ、一杯引っかけた後、三時、四時に起きて小説を書くという生活で、それが終わった後、出版社にこられていたようです。

清水町万石にお住まいで、「万石の会」という私塾を作られ、文章の書き方講座や、その後、飲み方を定期的にしておられました。そこに時々呼ばれていたんですが、一度、県の幹部の人と一緒に飲んだとき、名刺交換をしていると、いきなり「お前はこういう県庁の職員も知らんのか」と怒られたんです。私の頭の中には文化行政というのはほとんど抜けておりましたが、光岡さんは「文化記者は、行政もちゃんと回らないかんぞ」と言われました。ほかに、「カードを作れ」と言われました。光岡さんはたくさんカードを残しておられます。読書するときに気になったところをチェックし、カードに書き写し、ジャンル分けしておく、講演やエッセイを頼まれたときにすぐできるということを言われました。そ

れから、昭和六四年一月七日、昭和天皇が亡くなりましたが、光岡さんから「この元号が替わる日を、時代が変わり社会が変わるのをよく見ておけ」と一本の電話がありました。確かにあのときはすべてが自粛の日々でした。

さて、宮尾さんはいろいろなところに光岡さんと一緒に行かれた、勉強になったと言われていましたが、例を挙げるとどこだったのですか。

**宮尾**

木下順二先生の本郷のご自宅、中村汀女さんの世田谷の家、耕治人さんは、亡くなられてからではありましたが、中野の家とか。一緒に行かせていただきました。そういったことで、非常に広い先生の人脈をつなぎたかったのだと思います。今にして思えば、先生が一番やりたかったのはやはり後進を育てること、自分の後に続く人間を育てることだったのでしょうか。それで先生は熊本から離れなかったのだと思います。また、ご本人も作家としての仕事をやりたいという思いもあったのではないのでしょうか。

**松下** 吉井さんは光岡さんの文学には、何か思われるところがありますか。

**吉井** 「いづくの蟹」は、宇土半島の出

来事、風景をベースに、人の営み、人の心の変化、あるいはそれを外から見ている人の変化というものをずっと積み重ねてあって、「ああ、これわかる」とか、そんな部分がとても多くて共感しました。「千里眼千鶴子」も、三角半島の御船あたりの風景を書いてある

んですが、人の小さな営みの中に不思議なリアリティを感じる文章ではなかったかと思えます。短編はとも読みたいと思えます。

**宮尾**

熊本近代文学館では『熊本近代文学館報』を出してまいりましたが、光岡先生には毎回書いていただきました。先般、もう一度読み直してみました。先生の考えとか、いろいろなことがわかってきました。第三五号に「生きて動く文学館に」ということで、「九年六月つとめた文学館長をやめたとき、やはり肩の荷が下りた」「私は単に基礎条件を作り、路線を敷いたに過ぎない。その片方で個人的に私は小説を書きたいと思いつづけてきた。私はいま六十二。頭と身体がふつうに動くのは、あとせいぜい六、七年ではないか、との自覚があった」と、これが最後の先生の館報への寄稿です。やはり文学館の仕事、県政への貢献に手応えを感じながらも、作家としてずっと心のどこかに葛藤があったのかなと思ったところです。最後の二行、「初代熊本近代文学館長という肩書きがついて回るだろう。それは私の名誉にしたい」と、こ



宮尾 尚氏

れは私にとっては最も嬉しい言葉です。松下 光岡さんご本人は、短編が多いと書いておられました。ただ、「機雷」はかなり長編だと思います。また、寡作ともいわれます。確かに単行本としては一〇冊に満たない小説・作品集ですが、いろんなところにエッセイを、

自分の考えを書いておられます。例えば「月末拾遺」というのを、熊日に毎月一回書かれていました。その最終回の最後の方に、「熊本でも次々に若い人が登場してきて欲しい。熊本県内には若い世代の胎動がある」と、とても期待しておられました。光岡さんは多分、次の人の登場を最後まで待っておられて、そのためには何をすべきかというのを考えておられたのだろうなと思います。光岡さんは、あまりご自分のことを語られていないという印象ですが、一方で、命であり、死ぬことであり、生きることであり……ということが、ずっと深いテーマだったのかなと。「月末拾遺」にも何度か、命についての論が、また後半時期は川のことや阿蘇のこと、水のこと、いわゆる環境文化について、何度も繰り返して出てきます。やはりそのあたりは光岡さんの中で通底しているような気がしています。最後、まとめということで、吉井さん、話し足りないことがあれば。吉井 私は作家として、指導者として先生を尊敬していますが、同時に、熊本県内にある小さな文化の一つ一つを拾い出し、それに光を当てる努力をされ

た方だと思います。芽があるところがあれば、その下支えをしつつ、自分は決して表に出ないけれども、こうするといよいよという助言を与えながら育て、その人たちに光を当てていく、そんな文化の育て方をしてこられた方ではないかと思えます。

**宮尾**

今回の企画展が従来からの文学館の展示会と一番違うのは、今回は没後二〇年ということで、まだまだ先生をご存じの方がこの会場にもいっぱいいらっしゃることで。これを機会に、ぜひ光岡先生が遺されたもの、あるいは光岡先生は何者だったのかということを残していったらどうか。今日は我々の思い出話の会ではなく、この企画展をみんなで盛り上げていただいて、企画展が終わるときには、何か光岡さんの新しい発見が皆様の中から、展示の中からできれば、いい企画展になるのかなと思います。

**松下**

明日につながる企画展、いいですね。個人的には、私は新聞社の人間として光岡さんを理解していましたが、辞められた後の光岡さんの活躍が、多くの人にいい影響を与えたのだなと思いました。真面目に作品を書かれてきたというのはとてもよく知っていたんですが、それを上回るものがあったのだな、という思いを新たにいたしました。今日は、皆さんのこれからに、何らかの刺激になればともありがたいと思います。どうもありがとうございます。

# 企画展

## くまもとを拓く 熊本県公文類纂展

期間 令和7年1月24日～3月9日  
会場 展示室1・2



熊本県立図書館が所蔵する約二七〇冊の近代行政文書群である「熊本県公文類纂」を紹介する展示会。この資料群は、後世に引き継ぐために永久保存とした文書で、地域の農林水産業やインフラ事業、災害や医療についてなど、熊本に関する様々な記録が残る。

第一章では、現在所蔵する熊本県公文類纂全体がどのような項目に分類され、整理し、保管されているかを紹介した。また、明治期の永久保存文書の全体像はどうだったのかを、「熊本県記録章」の印章などを拠り所にして考察した。更に、当館所蔵の「疎開文書目録」を展示し、戦時中に疎開したり、貸し出された県庁文書についてや、現

在、熊本県の近代行政文書が色々な機関で保管されていることも紹介した。

第二章では、熊本県公文類纂の中から、熊本県で起こった、神風連や西南之事変を始め、明治五年の巡幸、明治六年に開催されたウィーン万博で出品候補となった特産物、令和五年に国宝となった通潤橋の明治期の褒賞に関する記録、明治二年の地震災害の記録などを紹介した。

関連イベントとして、2月23日(日)にシンポジウム「熊本県庁文書が照らす明治日本―『公文類纂』の魅力―」を開催した。  
(木下優子)



## 収蔵品展 アーカイブズシリーズ

アーカイブズに見るくまもと23  
期間 令和6年5月24日～7月7日



### ◆近代文学収蔵資料セレクション

令和六年に〈記念年〉を迎えた高群逸枝(生誕一三〇年)、宗不早(生誕一四〇年)、蓮田善明(生誕二二〇年)について、自筆の書や原稿などの貴重な資料を通して紹介した。また、(公財)永青文庫が所蔵する夏目漱石の中編小説「野分」の肉筆原稿を八年ぶりに特別公開した。

### ◆熊本藩の地域把握

検地帳と手永  
絵図から知る江戸時代の熊本  
熊本における地域把握の実態に迫った。土地調査は加藤氏による検地、細川氏による地撫、地引合、地推と名称を変えながら続けられ、田の等級の細分化や地番の設定など、より詳細な把握を進めたことが分かる展示構成とした。

アーカイブズに見るくまもと24  
期間 令和6年7月19日～9月8日



### ◆近代文学収蔵資料セレクション夏

令和六年に発行された新千円札の顔となった北里柴三郎に関連し、その甥にあたる阿蘇生まれの詩人 蔵原伸二郎を特集した。また、夏こそ読みたい再話文学の傑作「怪談」が、刊行二〇年を迎えた小泉八雲、生誕二二〇年の国文学者 蓮田善明を取り上げて紹介した。

### ◆つるつと南関素麺と江戸時代の人びと

熊本の名産品「南関素麺」に着目し、肥後国の名物番付である「名所 名物 東肥名寄下」(一八四〇年頃「天保晩年」撰)や惣庄屋・多田隈家文書(山鹿市指定文化財)などから、「南関素麺」の歴史と素麺づくりを生業として暮らしていた江戸時代の人びとの姿を紐解いた(協力・南関町)。

また、夏休み企画として、トピック展示「江津湖の記憶」を同時開催した。

熊本で創作を続ける作家 梶尾真治さんの作品から、へときをこえるであい〜に焦点を当てて紹介。自筆原稿のほか、最新作「おさき」(幻奇譚)のモチーフである「仏原騒動」の古文書も併せて展示した。同時に没後六〇年の節目を迎えた熊本ゆかりの小説家・長田幹彦を特集した。

◆開国170年 黒船来航と熊本  
熊本におけるペリー来航等の外交情報把握や開国の影響の実態に迫る展示を行った。時習館教官の木下鞆村の日記を軸に、外交情報 相州警備、鉄砲製造事業などの資料を展示した。関連して木下鞆村と横井小楠の往復書簡や相良藩所蔵の外交資料も紹介した。



アーカイブズに見るくまもと25  
期間 令和6年11月16日〜  
令和7年1月6日

### 関連イベント

#### ◆授業で使おう！くまもと文学・歴史館

熊本商業高校の日本史探究の授業と歴史分野の展示で連携授業を行った。図書館大研修室で日本史探究の授業を行い、その後展示室で解説を行った。教科書に書かれた歴史に関する実際の資料を目にする



ことで、生徒たちはリアルな歴史的事実の理解や地元の歴史についての理解を深めることができていた。

#### ◆あなたにも書ける!!カジシンのショートショート書き方講座

収蔵品展での特集に合わせ、作家の梶尾真治さんによる初のショートショート講座を開催した。創作に関わる貴重な話の数々に、県内外から集った来場者は熱心に耳を傾けていた。



### 佐藤 信館長 連続講演会



今年度も佐藤信館長による連続講演会を開催した。今年度は「人と事件をたどる古代九州」をテーマに全四回で実施し、毎回多数の参加者が集まった。毎

### 館蔵資料トピック展示

令和六年七月、二〇年ぶりに新紙幣が発行された。本県出身の細菌学者北里柴三郎が千円札の顔として登場したのを記念し「北里柴三郎・明治の紙幣発行」と題するミニ展示を行った。熊本医学校で学んだ柴三郎は、恩師マンズフェルトの勧めにより東京医学校(現東京大学医学部)への進学を決め、明治七年に上京。県庁幹部の山田武甫邸に下宿することを届出した自筆資料を初公開した。同じ頃、贋札の流通に頭を悩ませていた政府は、良質の紙・イ

回申し込みをされる方々も多いが、今年度は高校の日本史教師や若い世代の参加も見られた。くまもと文学・歴史館 YouTubeチャンネルで各回の講演会動画の配信も行い、多数の視聴回数を重ねている。

- 第1回 6月8日(土)  
演題「筑紫君磐井の戦い」
- 第2回 10月5日(土)  
演題「斉明天皇と白村江の戦い」
- 第3回 12月7日(土)  
演題「大伴旅人と大宰府」
- 第4回 3月8日(土)  
演題「藤原広嗣の乱」

ンクの製造、職人の確保を進め紙幣改造に着手。熊本県令富岡敬明にあて、新技術を駆使した紙幣印刷工場の視察を促す、大蔵省紙幣頭の得能良介の明簡を紹介した。ともに、「熊本縣公文類纂」と呼ばれる戦前の県庁公文書からの紹介で注目を集めた。



# 友の会事業

## ◆定例事業

- 月案内発行 くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。
- 文章勉強会 毎月一回開催。有志による文章講座。
- 歴史勉強会 毎月一回開催。有志による古文書講座。

## ◆湧水発行

○会員の作品を集めた文芸誌「湧水」の三十二号発行。

## ◆今年度の主な事業

- 5月11日 友の会総会(西川盛雄氏による記念講演会 演題「言葉の力」詩に魅せられて)」
- 奇数月(5、7、9、11、1月) 短歌講座 講師：阿木津英氏
- 10月14日 湧水講演会 演題「中世肥後の禅宗の広がりについて」 講師：青木勝士氏

○11月3日 秋の文学・歴史バスツアー(江田船山古墳、装飾古墳館、菊池神社方面)



# 追悼展

期間 令和6年11月30日、令和7年1月6日

会場 展示室2

井上智重氏の業績を紹介する追悼展示会を開催。新聞記者時代の二〇〇一年から二〇一〇年まで八五回連載し、熊本ゆかりの人物を取り上げた「異風者伝」、二〇〇四年から二〇一〇年まで、週五回の連載を続けた「言葉のゆりかご」、館長退任後、二〇一七年七月から一年間三五六回連載した「いつも隣に山頭火」をまとめた著書などを紹介した。

また、熊本近代文学館長時代に開催した展示会のチラシも展示した。種田山頭火、荒木俊馬、夏目漱石、小泉八雲、安永路子、近代史、古代史、マンガなど、彼の幅広いテリトリーを紹介した。

# 追悼 井上智重元館長

令和六年十月一日、くまもと文学・歴史館初代館長の井上智重氏が、ご病気のため亡くなられました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



井上智重(いのうえ・ともしげ)

昭和十九年(一九四四年)生まれ。熊本大学法文学部卒業後、佐賀新聞社を経て熊本日日新聞社に入社。編集委員室長などを務める。平成二十二年(二〇一〇年)から二十八年(二〇一六年)まで熊本近代文学館長。著書に『異風者伝 近代熊本の人物群像』、『言葉のゆりかご』、『山頭火意外伝』などがある。

# くまもと文学・歴史館のご案内

## 所在地

熊本市中央区出水2丁目5番1号  
(熊本県立図書館併設)  
電話(096) 384-5000(代)

## 開館時間

午前9時30分～午後5時15分

## 休館日

火曜日・毎月最終金曜日  
年末年始・特別整理期間

## 入場料

無料

## 最寄りの交通機関

(1)市電Ⅱ「市立体育館前」下車・徒歩5分  
(2)バスⅡ「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩5分

# 文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。

くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。

詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合わせ下さい。

くまもと文学・歴史館報 第10号

令和7年(2025年) 3月31日発行

編集発行 くまもと文学・歴史館

〒862-8612 熊本市中央区 出水2丁目5番1号

電話096-384-5000(代) FAX096-385-4214